

平成28年1月20日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 熊本県教育委員会

所 在 地 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18-1

代表者職氏名 田崎 龍一

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	くまもとけんりつたかもりこうとうがっこう	ふりがな	はやま けんいち
学校名	熊本県立高森高等学校	校長名	羽山 賢一
ふりがな	たかもりちょうりつたかもりちゅうがっこう	ふりがな	ふるしょう やすのり
学校名	高森町立高森中学校	校長名	古庄 泰則
ふりがな	たかもりちょうりつたかもりちゅうおうしょうがっこう	ふりがな	かわづ しんや
学校名	高森町立高森中央小学校	校長名	河津 伸哉
ふりがな	たかもりちょうりつたかもりひがしちゅうがっこう	ふりがな	にしじま とおる
学校名	高森町立高森東中学校	校長名	西嶋 徹
ふりがな	たかもりちょうりつたかもりひがししょうがっこう	ふりがな	ふくだ まさや
学校名	高森町立高森東小学校	校長名	福田 雅也

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

児童生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成を目指し、小中学校における音声と文字の計画的・系統的な指導、小中高一貫した CAN-DO リストの形での学習到達目標設定、指導・評価の在り方、及び英語教育における効果的な ICT の活用の研究を通して、小中高の接続を重視した英語教育の研究開発に取り組む。

(2) 研究の概要

- 小学校における英語教育の早期化と教科化に向けて、教育課程の在り方や指導及び評価の在り方についての実践的研究
- 小学校卒業段階で初歩的な英語運用力を育てるため、小学校での「読むこと」「書くこと」の指導及び評価の在り方についての実践的研究

- 小中学校において、音声と文字の関係などについて計画的及び系統的な指導、小学校英語教育と中学校英語教育の円滑な接続の在り方についての実践的研究
- 「生徒が英語を用いて何ができるようになるか」という視点から、中・高等学校における指導方法の改善及びパフォーマンステスト等の充実の在り方についての実践的研究
- 小学校と中学校、高等学校の綿密な連携を図り、小中高を通した CAN-DO リストの形での学習到達目標設定と、それに基づく指導方法等の改善についての実践的研究
- 英語教育における効果的な I C T の活用の在り方等についての実践的研究
- 英検等の外部検定試験を活用した効果検証の実施

(3) 現状の分析と仮説等

① 現状の分析と研究の目的

ア 現状の分析

<小学校>

- ・ 全ての小学校において定期的に A L T が来校し、外国語活動等の指導の支援を行っている。その際、学級担任が T 1 の役割を務め、授業を円滑に実施できるようになってきている。
- ・ 各学校では授業の流れのパターン化が図られ、児童も見通しをもって学習活動に取り組むことができている。
- ・ 特に、導入やゲーム活動等の場面において、電子黒板等の I C T の活用が図られつつある。
- ・ 学級担任のクラスルーム・イングリッシュの発話量が増加しつつある。
- ・ 学習目標達成に向けた「主な言語活動」と「評価方法」について、整合性が見られない場合があり検討が必要である。
- ・ 学校総体としての外国語活動等の推進に、今後更に取り組んでいく必要がある。

<中学校>

- ・ 英検 3 級以上を取得、及び相当の英語力を有すると思われる生徒数の割合は、27.9% であり、生徒の英語力向上を更に推進していく必要がある。
- ・ 「CAN-DO リスト」を設定している学校の割合は 100% (H26 年度末予定) であるが、公表、及び達成状況の把握を推進していく必要がある。
- ・ 中学 1～3 年生の英語の授業で、授業中の半分以上の時間、言語活動を実施している状況に課題がある。今後も、言語活動に当てる時間の増加はもとより、言語活動の質の向上に取り組んでいく必要がある。
- ・ パフォーマンステストは、全ての学校で実施されているもの、その方法や実施回数等に課題がある。
- ・ 授業時において、なるべくクラスルーム・イングリッシュを活用するよう、英語教員の意識改革を図っていく必要がある。

<高等学校>

- ・ 英検 3 級以上を取得、及び相当の英語力を有すると思われる生徒数の割合に課題がある。生徒の英語力向上を更に推進していく必要がある。

- ・ 「CAN-DOリスト」を設定しているが、公表、及び達成状況の把握を推進していく必要がある。
- ・ 英語学習意欲を更に向上させる必要がある。

＜小・中・高の連携について＞

- ・ 英語教育における小・中の連携については、各管内で「英語担当者指導法研修会（県教委主催）」を毎年実施することで推進が図られつつあるが、指導方法やカリキュラム等の連携において課題がある。
- ・ 中・高の連携について、本県では県立高等学校附属の中学校（県内に3校）を有していることもあり、当該の中・高においては連携が図られているが、その他の学校では課題がある。

イ 研究の目的

小学校における英語教育実施学年の早期化、教科化、指導体制の在り方や中・高等学校における英語教育の高度化等、初等中等教育を通じた系統的、かつ、先進的な取組を支援するとともに、その成果等を県内に普及させることにより、本県英語教育の推進・充実に資する。

② 研究仮説

小中学校における音声と文字の計画的・系統的な指導、小中高一貫した CAN-DO リストの形での学習到達目標設定、指導・評価の在り方、及び英語教育における効果的な ICT の活用に取り組むことで、将来的な小学校英語教育の早期化・教科化、及び中・高等学校における英語教育の高度化等に対応する体制が構築されるとともに、小・中・高を通じて児童生徒の英語によるコミュニケーション能力の向上が図られるであろう。

③ 研究成果の評価方法

- 事前実態調査と毎年度末の実態調査（児童、生徒、教員、保護者）と調査結果の分析
- スピーキングテストやライティングテスト等のパフォーマンステストの実施と分析、経年比較
- 外部決定試験（児童英検・英語検定）等の活用による英語力の調査と分析、経年比較
- 熊本県学力調査（児童生徒質問紙調査も含む）結果の経年比較 等

（４）研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
①小学校 外国語活動型	第 1 学年 コマ	第 1 学年 0.6 コマ	第 1 学年 0.6 コマ	第 1 学年 0.6 コマ
②小学校 教科型	第 3 学年 コマ	第 3 学年 1 コマ 第 5 学年 2 コマ	第 3 学年 1 コマ 第 5 学年 2 コマ	第 3 学年 1 コマ 第 5 学年 2 コマ

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第三年次、校種別

① 第一年次

- ・ 運営指導委員会及び英語教育強化地域連携協議会を設置し、小学校・中学校・高等学校が連携して、具体的に指導体制づくりの準備と研究を進める。
- ・ 先進地視察、研修等の実施、インターネット等を通して実践事例等の情報収集を行う。

【小学校】

- ・ 小学校英語の年間指導計画の見直し
- ・ 小学校英語教材（文部科学省作成）の効果的な活用方法等の研究
- ・ 5、6年における CAN-DO リストによる学習到達目標設定の在り方に関する研究
- ・ 校内研修の在り方等についての研究
- ・ 研究校視察、研修、インターネット等を通して実践事例等の情報収集
- ・ 音声と文字の関係についての指導方法等の研修
- ・ 「読むこと」「書くこと」の指導に関する情報収集
- ・ 英語教育における ICT の活用の在り方に関する研究

【中学校】

- ・ パフォーマンステストの実施方法等の研究
- ・ CAN-DO リストの形による学習到達目標、単元計画及び年間指導計画の見直し
- ・ 英語の授業における英語使用量（生徒・教師）の増加
- ・ 外部検定試験の活用による英語学習意欲等の実態把握

【高等学校】

- ・ パフォーマンステストの実施方法等の研究
- ・ CAN-DO リストの形による学習到達目標、単元計画及び年間指導計画の見直し
- ・ 小中学校における英語教育の実態把握（学校、中学校の公開授業と授業研究会に参加）
- ・ 中高連携の推進強化（生徒同士、教員同士の連携の推進）

② 第二年次

- ・ 運営指導委員会及び英語教育強化地域連携協議会による、進捗状況の把握・管理、及び指導体制の強化
- ・ 研究実践の推進・充実

【小学校】

- ・ 小学校英語教材（文部科学省作成）の効果的な活用
- ・ 5、6年における CAN-DO リストによる学習到達目標の設定（単元計画及び年間指導計画等の見直し、評価方法などの実践的研究
- ・ 校内研修の充実（外部講師等の活用）
- ・ 音声と文字の関係についての効果的な指導の実践
- ・ 「読むこと」「書くこと」に関する実践的研究
- ・ 英語教育における ICT の効果的な活用

【中学校】

- ・ 小学校における「教科型」英語の授業交流と授業研究
- ・ 小学校「教科型英語」を経験した生徒向けの学習内容の高度化等の研究と指導計画作成

- ・ 英語の授業における英語使用量（生徒・教師）の更なる増加
- ・ 効果的なパフォーマンステストの実施及び検証
- ・ CAN-DO リストの形による学習到達目標、単元計画及び年間指導計画の逐次見直し
- ・ 外部検定試験の活用による英語学習意欲等の実態把握及び検証（経年比較）

【高等学校】

- ・ 効果的なパフォーマンステストの実施及び検証
- ・ より高いコミュニケーション能力をめざしたコミュニケーション重視の英語授業内容の研究及び実践
- ・ CAN-DO リストの形による学習到達目標、単元計画及び年間指導計画の逐次見直し
- ・ 小中学校に対する CAN-DO リストの形による学習到達目標設定に係る支援
- ・ 中高連携の推進強化（生徒同士、教員同士の連携の更なる推進）

③ 第三年次

- ・ 研究成果等の効果的な情報発信（研究発表会、公開授業、インターネット上の情報発信等）
- ・ 研究のまとめ
- ・ 本県における次年度以降の英語教育の充実に係る施策の計画立案

【小学校】

- ・ 小学校英語教材（文部科学省作成）の効果的な活用及び事例集等の作成
- ・ 5、6年における CAN-DO リストによる学習到達目標の見直し、それをふまえた単元計画及び年間指導計画等の作成、評価方法などの実践的研究
- ・ 校内研修の更なる充実
- ・ 研究校視察、研修、インターネット等を通して実践事例等の情報収集
- ・ 音声と文字の関係についての効果的な指導の実践
- ・ 「読むこと」「書くこと」に関する実践的研究
- ・ 英語教育における ICT の効果的な活用

【中学校】

- ・ 小学校における「教科型」英語の授業交流と授業研究
- ・ 小学校「教科型英語」を経験した生徒向けの学習内容の高度化等に対応する授業実践
- ・ 英語の授業における英語使用量（生徒・教師）の充実
- ・ 効果的なパフォーマンステストの実施及び検証
- ・ CAN-DO リストの形による学習到達目標、単元計画及び年間指導計画の逐次見直し
- ・ 外部検定試験の活用による英語学習意欲等の実態把握及び検証（経年比較）

【高等学校】

- ・ 効果的なパフォーマンステストの実施及び検証
- ・ より高いコミュニケーション能力をめざしたコミュニケーション重視の英語授業実践及び検証
- ・ CAN-DO リストの形による学習到達目標、単元計画及び年間指導計画の逐次見直し
- ・ 小中学校に対する CAN-DO リストの形による学習到達目標設定に係る支援
- ・ 中高連携の推進強化（生徒同士、教員同士の連携、カリキュラム・指導方法等の連携）

○平成27年度の進捗状況・課題

- ・ 運営指導委員会及び英語教育強化地域連絡協議会を設置し、小学校・中学校・高等学校が連携して、指導体制の在り方等について研究を進めることができた。
- ・ 強化地域拠点の学校間連携については、中学校加配教員による小学校及び高等学校での授業にT2としての参加を始め、相互の授業参観や定期的な連絡会を実施している。
- ・ 強化地域拠点の先進地視察は1月実施予定。（視察地は東京都品川区、中央区）
- ・ 平成27年10月には高森町内の全教職員による研修会を開催し、教室英語の使い方や、小学校英語の指導・評価等について講話・演習等を実施した。

【小学校】

- ・ 本事業の開始にあたり、中学校管理職（英語科）が本事業の概要等について説明を行うとともに、研究の方向性等について共通理解を図った。
- ・ CAN-DO リストを伴った1年～6年までの年間指導計画を本年7月までに作成した。今後、本年度の実践を元に計画の評価、改善を進める必要がある
- ・ 先進事例については、インターネット等を通して情報収集を行うとともに、平成28年1月20日～22日の日程で東京都品川区及び中央区の取組を視察予定。町内教職員8名が参加。
- ・ 「音声と文字の関係についての指導方法等の研修」については、フォニックスを活用しながら授業実践に取り組んでいるが、今後更に研修を深める必要がある。
- ・ 「読むこと」「書くこと」の指導については、今年度の授業実践を検証しながら来年度の教育課程を検討しているところである。
- ・ ICTを活用した授業の在り方について校内研修を実施した。

【中学校】

- ・ 「パフォーマンステストの実施方法等の研究」については校内で研修を実施、定期的に実施している。
- ・ 「CAN-DO リストの形による学習到達目標、単元計画及び年間指導計画の見直し」については、本年度採択された平成28年使用教科書に基づき作成した。
- ・ 「英語の授業における英語使用量（生徒・教師）の増加」については、視察研修等を実施しながら現在授業改善に取り組んでいる。
- ・ 「外部検定試験の活用による英語学習意欲等の実態把握」については、英語検定を全ての生徒に実施予定。また GTEC をモニター受験し来年度以降の実施を検討している。

【高等学校】

- ・ 各授業において英語による指示、単元内容導入部分における英語の使用などで、授業を英語で行う割合は増加している。
- ・ パフォーマンステストについては、2年英語表現Ⅰ（1単位）において、生徒が自信を持って発話ができるようにワークシートを活用している。
- ・ 校内検定（本校独自の検定課題教材：国数英で実施）における英語教材を、よりコミュニケーションを重視した内容に改善していく必要がある。
- ・ 習熟度別指導におけるパフォーマンステストの在り方や、ALTを活用した評価方法の研究を推進する必要がある。
- ・ 小中高を貫く CAN-DO リスト完成に向けて、本校生徒の実態を十分に踏まえながら、小中と更に連携を深める必要がある。

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第三年次、校種別

【第一年次】

- ①小学校 ・実態調査 ・熊本県学力調査 ・英検 Jr
- ②中学校 ・実態調査 ・熊本県学力調査 ・パフォーマンステスト ・英検 ・GTEC
- ③高等学校 ・実態調査 ・パフォーマンステスト ・英検

【第二年次】

- ①小学校 ・実態調査 ・熊本県学力調査 ・パフォーマンステスト ・英検 Jr
- ②中学校 ・実態調査 ・熊本県学力調査 ・パフォーマンステスト ・英検 ・GTEC
- ③高等学校 ・実態調査 ・パフォーマンステスト ・英検

【第三年次】

- ①小学校 ・実態調査 ・熊本県学力調査 ・パフォーマンステスト ・英検 Jr
- ②中学校 ・実態調査 ・熊本県学力調査 ・パフォーマンステスト ・英検 ・GTEC
- ③高等学校 ・実態調査 ・パフォーマンステスト ・英検

○平成27年度の進捗状況、課題

【小・中・高等学校】

- ・ 小中高を通じて共通した実態調査については実施できていない。来年度に向けて調査内容及び実施時期の検討を行っている。

【小・中学校】

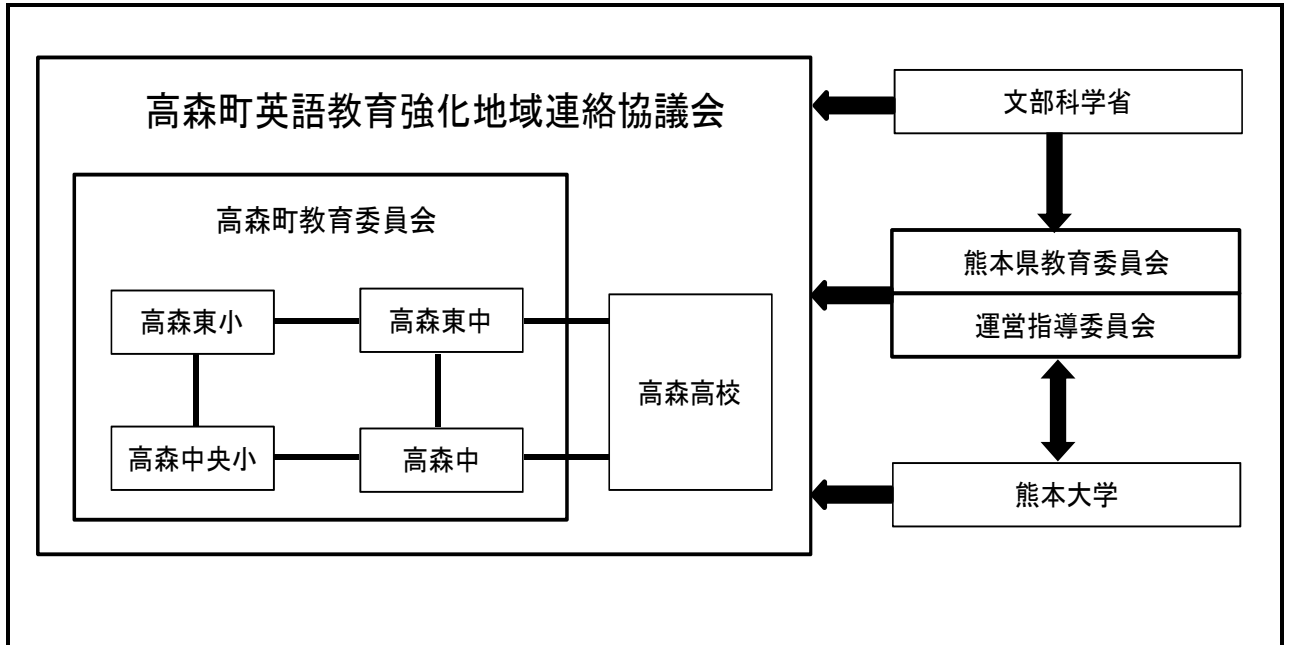
- ・ 外部検査として従来より英検・英検 Jr を実施しているが、本年度は来年度以降の実施も視野に入れ、中学校において GTEC をモニター受験した。検査の内容や時期を勘案し精査するとともに、経年比較を行っていくようにする。
- ・ パフォーマンステストについては適時実施しているが、その効果的な実施方法や実施時期等については、今後検討していく必要がある。

【高等学校】

- ・ 各学期において授業評価を行い、教員の授業評価とともに、生徒の主体的な学びの実態調査を行っている。
- ・ 英検（H27.12 現在）の合格状況は、現在のところ例年をやや上回る合格者数である。
- ・ パフォーマンステストについては授業、及び教科会を通して研究、準備中であり、英語表現 I（2年）を中心に3学期に実施予定である。
- ・ 授業評価については「もっと深く英語を学びたい。」の項目が最も低かった。基礎基本を徹底しつつ、サイドリーダーなどを通して英語をより深く学ぼうとする意欲を喚起することが課題である。
- ・ 会話については、現在形や現在進行形の文については発話の習熟度が上がったが、ほとんどの生徒について、動詞の活用について課題がある。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

○活動計画

- 英語教育強化地域拠点事業の運営について、次の点について専門的見地から指導、助言、評価等を行う。

運営及び研究開発についての指導助言に関すること。

年度末及び指定期間終了時における事業評価に関すること。

研究成果を普及する方策についての指導助言に関すること。

- 年に3回の運営指導委員会を実施する。

○平成27年度の進捗状況、課題

- 平成27年12月までに計2回の運営指導委員会を実施した。
- 運営指導委員会では、強化地域拠点の教育委員会担当者及び研究校の管理職及び担当教諭が進捗状況等の報告を行うことにより、運営指導委員から直接、指導・助言を得ることができた。主な指導・助言の内容は次のとおり。

- 英語教育における目指す児童・生徒像を明確にしておくことが重要である。小中高と12年間学んできた高森の子どもたちの姿、目指す児童・生徒像を小中高で共有化を図ることが出発点であるとする。
- 言葉は本質的に音声である。音声を優先し、あとで文字で補強する指導が重要である。小学校では「聞く」「話す」を十分に行い、それを中学校の「読む」「書く」につないでいくことが重要である。
- 子どもたちの発達段階を考慮して、音声と文字をつないでいく指導を行っていくことが必要である。
- 最終的には高森高校の生徒が、高森町の自然、環境、特徴等を、外に向けて発信できるようにしていくことが考えられる。町のパンフレット（英語）を高校生が作成したり、阿蘇ジオパークの観光ガイドをしたり、他にも、夏休みのインターンシップを利用して、外国人観光客に対して、英語を使って高森町を紹介したりすることも考えられる。
- 学習の中心は「関心をもつこと」だと考える。小中高の先生方が話合い、どうやったら関心を維持・継続させることができるのかについて研究を深めていくことは有意義である。
- 特に小中については、CAN-DOリストを詳しく作って、それに基づいて連携して取り組んでいくことが重要である。小学校で学んだ子どもたちが中学生になったとき、中学校ではそのCAN-DOリストでチェックを行い、できるところから英語学習を始めることも考えられる。
- 本事業では英語教育に関する研究・実践が中心となるが、言語教育の一環として捉えれば、他教科・領域（特に国語）での取組を推進させることができる。（教科等にかかわらず、全教職員で本研究に取り組むことができる。）等々

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	・ 地域連絡協議会立ち上げ準備	
5月	・ 第1回英語教育強化地域連絡協議会 研究内容等の再確認、役割分担 等 ・ 各校校内研修 [校内研究への位置づけ、組織づくり等]	
6月	・ 英検	

7月	<ul style="list-style-type: none"> ・小中一貫した CAN-DO リストの形による学習到達目標設定の在り方等に関する研究 ・講師招聘による CAN-DO リスト作成に係る研修会の実施 ・モンタナ州立大学短期留学派遣生徒事前研修（高校） 	
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・講師招聘による音声と文字の指導に関する研修会の実施 	第1回運営指導委員会 (県庁)
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・英語教育に係る効果的な ICT 活用の在り方に関する研修会の実施 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・英検 ・モンタナ州立大学短期派遣留学生徒（高校）による研修報告会（於：高森中学校） ・中高相互授業参観 	
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・前期取組の評価、改善 ・モンタナ州立大学短期派遣留学生徒（高校）による研修報告会（於：高森高等学校） 	第2回運営指導委員会 (県庁)
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・小中高の授業実践交換会 ・高森高校教諭を T2 とする中学校研究授業実施 ・第2回英語教育強化地域連絡協議会（プロジェクト会議） 	
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・全国連絡協議会参加 ・先進校研究視察 ・英検 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・第3回強化地域拠点連絡協議会 研究のまとめ、反省と次年度への志向 	第3回運営指導委員会 (県庁)
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度の計画 	
<p>【その他の取組】</p> <p>8月 「高森町新教育プラン推進フォーラム」における地域へ向けての情報発信</p> <p>11月 熊本県教育委員会指定「未来の学校」創造プロジェクト研究発表会における ICT を活用した小学校英語科の授業公開</p> <p>11月～12月 文部科学省指定「人口減少社会における ICT の活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」に係るテレビ会議システムを活用した遠隔授業の実践（小中学校）</p>		